

春日惣次郎と甲陽軍鑑

『同末書下巻初の端書に 某惣次郎ハ弾正あねの子也。我等父ハ、弾正ようしやうの時、公事を仕、弾正にかちたる者也。しかれ共、又、拙者を弾正ねんごろ仕、三百貫の知行をくれて置候。弾正のおんあさからずかふむり申候春日惣次郎、弾正言葉おぼえて、ここに書付申候。今壺人ハ右申大蔵彦十郎とて、大蔵大夫之是もあねの子なり。大蔵道入がためにまごなり。彦十郎・惣次郎兩人、甲陽軍鑑合二十三冊の筆者也。仍如件。』とあり。』

(出典：「甲陽軍鑑末書下巻」)

『此書物かきつぎたる我等ハ、春日惣次郎と申候。川中嶋衆皆、景勝公へめし出され候へ共、我等ハ甲州くづれの時分、越中へ罷^{まかりこし}越^{おかけ}候ゆへ、景勝へ御抱の衆にはづれ候。ろうくいたし、佐渡のさわだといふ在郷におみて、是をかきおき、三十九歳の極^{ごくげつ}月より、しやくをわづらひ、ちやう四十のとし三月中じゅんにしするなり。仍^{よつてくだんの}如^{ごとし}レ件。

天正拾三年西乙三月三日 高坂弾正内 春日惣次郎書^{ばつぶん}レ之』

(出典：「甲陽軍鑑大成」巻二十 本文篇下、浅野裕一・浅野史拵著「甲陽軍鑑の悲劇」)

死期が迫っていると悟っていた惣次郎の跋文である。佐渡に渡ってから3年後のことである。

『春日惣治郎当国於竹田村卒年四十歳同村弾宗太運寺十六羅漢堂ノ脇ニ葬ル』(出典：伊藤三右衛門著「佐渡古実略記」^{きどこじりつりやつき})

『武田家の老臣高坂弾正昌信の甥なり天正十年當國に遁れ來り竹田村大運寺の羅漢堂に寓居し此所に在りて昌信の遺著なる『甲陽軍鑑』を増訂して歿せり元同寺にありし有名の未開紅といへる梅は其携へ來れる鉢栽を移し植えしものなりといふ。』(出典：本間周敬著「佐渡人名辞書」)

天正十年に武田家は滅亡している。弾正死後 春日惣次郎が引継ぎ、徳川家康の誘いも断り、越後、佐渡で執筆を続け40歳で病死した。惣次郎は本書の完成に大きく寄与した。惣次郎が書き続けなかったら本書は完成しなかったの

ではないか。なお、惣次郎の一族は高坂家本家の家紋「重ね十六葉菊」を用いている。

その後、江戸時代の兵学者 小幡勘兵衛景憲（1572～1663 年）が現在のかたち^{おぼたとらもり}に補訂・編纂し、講説につとめたと言われてきた（本編 20 巻全 59 品、末書 2 巻）。勘兵衛景憲の祖父の小幡虎盛は海津城の武将（弾正の副将）であった。勘兵衛景憲は徳川に兵学者として仕え門下に北条氏長（1609～70 年）や山鹿^{やまが}素行^{そこう}（1622～85 年）を輩出した。「甲陽軍鑑」は兵法書として江戸時代を通じて広く読まれた。

小幡虎盛の弟、小幡光盛^{おぼたみつもり}は海津城番であった。武田家滅亡後は森長可、上杉景勝に仕えた。上杉景勝の時代は飯山城へ配された。弾正の三男の高坂^{まささだ}昌定は、天正 10 年（1582）海津城落城後、越後の小幡光盛を頼ったが、その後、信濃国下伊那郡天竜川辺に蟄居した。小幡勘兵衛景憲は「甲陽軍鑑」と武田遺臣より学んだことを基に「甲州流軍学^{こうしゅうりゅうぐんがく}」を創始した。

『景憲のほかに外記孫八郎・西条治部が聴き書きして補筆し、特に軍学書として収録した「信玄全集末書」は「軍法」「城取り」「出陣体制」「陣取り」「布陣」「戦法」「備え」「城攻めの配置」「兵器」「陣容」など、図入りで克明に解説している。「軍鑑を読まざる者、武士に非ず」幕府は、各藩公に出資を求め、いづれか版を重ねて、下級武士にいたるまで、“必読の書”として奨励した。また、「軍鑑」をタネ本にした「武田三代軍記」など庶民向けの読み物も数多く出版されて人気を呼んだ。』（出典：坂本徳一著「甲州流軍学 小幡景憲」）

但し、上記の「甲陽軍鑑」、「信玄全集末書」、「武田三代軍記」が世に出るまでには以下の様な複雑な事情があった様である。

『勘兵衛景憲は、兄が武田滅亡の折、父昌盛から預かった高坂弾正・春日惣二郎の手記、信玄直伝の軍学書を託されて、小幡家と懇意にしていた府中の旧家に保管してもらい、近江の甲賀郡に住み、十年の修行を重ねている。』

（出典：坂本徳一著「甲州流軍学 小幡景憲」）

小幡虎盛(勘兵衛景憲の祖父 海津城武将)、光盛(虎盛の弟 海津城番)、昌盛(勘兵衛景憲の父)、勘兵衛景憲と小幡家の果たした役割は大きい。

（川端紅葉著）